

横浜雑感二題

鈴木 美恵子

「其の二」電話の向こうで

ある時「数日前からお腹の調子が悪くてね」と電話の主は話し始めた。八十歳になる一人住まいのTさんである。

一日十五回も手洗いに駆け込み、夜もグッスリ眠れないと言う。私は、すぐに掛りつけ医へ行くよう勧めた。とても素直な方で、翌朝一番で病院へ行き、薬を出してくれたと安心した声だった。腸が疲れていると診断されたそうだし、かし三日〜四日〜七日と服用しても一向に治る気配がない。Tさんは別のかかりつけ医へ行き、再び症状を訴えたが同じような診断であった。薬を飲み続けても症状は変わらず、一カ月が経過した。

不安は増すばかりで、三つ目の病院を訪ねた。だがそこでは「病院回りばかりしては駄目ですよ」と言われてしまったそうだ。あれから二カ月が過ぎた。

思いつめたTさんは、胃腸科専門病院で内視鏡検査を受けることにした。ここでもどこも悪いところ

はないと言われた。喜びの反面疑念は晴れない。イライラが伝わってくる。そこで私は電話口で漢方治療を提案した。六〇〇CCの水を入れた容器（やかん等）に生薬を入れ、三〇〇CCになるまで四〇〜五〇分かけてトロトロ煎じる。それが一日分で、三回に分けて空腹のとき（食前が良い）に飲む方法である。だが高齢の一人住まいで、毎日の煎じ薬作りは面倒かもしれないと危惧していたが、治したい一心でTさんは頑張っていた。

だが一週間も経たないうちに、やはり「治らない、治らない」と言い出した。西洋薬（新薬）に馴染んでいる我々現代人は、漢方薬に切り替えることは心配で勇気が要るだろうし、効果も待ちきれないのだろう。外出の出来ない生活に不安が募り、焦る気持ちはよく解る。やがて考え抜いた末に、最終手段として大学病院で全身の精密検査を受けようと思いを決めた。五か所目である。四カ月が経過していた。

検査結果はやはり、今まで同様悪いところは見つからなかった。ただ今までは違う薬と「漢方製剤」を処方された。連絡を受けた私は内心ホッとした。西洋薬の他

に「漢方製剤」が加わったことで、それが体にあつていなければ症状が落ち落ちてくるのではないかと思えた。病院で検査をしても異常がないのに、体に不調の自覚症状がある場合は、人それぞれの体質「証」によつて身体全体をみる漢方治療が向いている。私の長年の経験から常々思っている。

漢方とは元々古代中国から伝わったもので、天然素材の複数の生薬を組み合わせ、その人の体質「証」によつて全体のバランスを取りながら、その人に合った薬で治療する方法である。つまり、医師は病名ではなく症状で生薬を選び、患者に合わせて調節する。生薬一〇〇%の煎じ薬なので、様々な成分が体に行き渡り体を温める。手術後のケアにも向いているのではないだろうか。効き方が遅いというイメージがあるが、症状と生薬が一致すれば一〜二日で効果の現れるものもある。

ちなみに「漢方製剤」とは、煎じ薬を乾燥させて顆粒状に加工したものである。利点は、手間がかからず持ち運びに便利である。規格が統一されて出来上がっているので、医師のさじ加減で患者一人一人に合わせて調節することは出来ない。現代医学と患者一人一人

に合わせた漢方治療が、連携を図りながら治療を進めたら未来の医療はどう変わっていくのだろうか。脳老化を防ぎ、人生一〇〇歳時代がやってくるのだろうか。

一週間程してから、「なんだか少しづつ良くなっている感じがしますよ」と電話の声が明るかった。その後経過観察のため通院を続けているが、光明が見えてきたと喜んでいる。大好きな趣味の詩吟教室へ行かれるようになって、心にも張りが戻ってきたようだ。

治療を求めて病院を転々とし、ようやく希望が持てるようになるまで五カ月を要した。それが長かったのか短かったのか私にはわからない。完治するまでにはまだ月日を要するだろう。私には電話で話を聞く行動しか出来ないが、何と言つても本人の前向きな気持ち、今より良くなりたいたいという気持ち、持ちが実を結び、回復への兆しが見えてきたと思える。ただTさんの場合は良い方なのかもしれない。年齢による体の変化は様々あるが、高齢化社会に於いてよく耳にする「年齢のせいです」では済まされない出来事だった。Tさんはまもなく八十一歳になる好々爺だ。ゆつたり構えて、焦らず、ガンバレ！

(終)

【其二】優しい手

今年の暑さは半端ない。確か昨年六月から夏日が始まったと記憶しているが、今年は五月からだ。その日、私は電車を乗り換えるため横浜駅に降り立った。今日もどこかで事故やら故障でもあったのだろうか。ホームは人、人、人で溢れ、びっしりと並んだ人の頭が波のように上下に揺れ、階段を下っていた。どこか遠くの景色を眺めているような感覚で、あの中には入りたくないなあと思っていたが、そのうち頭痛がしてきた。どうも暑さとそのひどい混雑にエネルギーを取られたようだ。後に知ったことだが「人込み頭痛」と言って緊張やストレスで起こるそうだ。確かに人込みは苦手だ。やはり寺社や公園巡りが好きである。

このまま電車に乗っては危ないと思ひ、外の空気に触れてどこかで休もうと駅の構外へ出た。何度か行ったことのある喫茶店を思いついた。そこはオーブンテラス風で、あまり混雑せずゆっくり表通りを眺められるお店だ。ジュースを注文すると、大きなソファに重い体をフウフウともたれかけた。一息ついたが肩も首筋もコリコリに張っている。なんとなく寄る辺ない気持ちでぼんやりしていた。

隣の席に誰かが座ったことすら気が付かなかった。突然耳元で「うるさくないですか？」と声をかけられた。振り向くと三人組の若い女性たちだった。自分たちのお喋りがうるさくて迷惑ではないかと気にしていたようだ。時々肩を揉みながら遠い目で景色を眺めていた私には、お喋りさえも耳に入ってこなかった。「全く気にならないから大丈夫ですよ」と答えたように思う。ところが程なく中の一人が「お辛そうですね、肩をお揉みしましょうか？」と思ひ切ったように声をかけてきた。私は「せっかくの楽しい時間、そんなに気を使わなくても良いのですよ」と返したと思う。だがすぐに「いえ大丈夫です。あちらを向いてください」。別の一人が「手のひらを出してください」。私は有り難く背を向け手を差し出した。「すみません、ではお願いします」。こんなことってあるのだろうか、何か勘違いではないだろうかと心の中で繰り返し呟いていた。その手は強すぎず弱すぎず、凝りを確かめるように少しづつ場所をずらしながら、優しく手当てしてくれた。柔らかいぬくもりが肩、首筋、背中、手のひらと伝わっていき、先ほどまでの辛い感覚が

スーッと消えていった。誰の手にもそれぞれ表情がある。施術者なのかと思ひ「随分お上手ですね、おいくつですか」と尋ねると「十八歳です。福祉の勉強をしています」。なるほど合点がいった。私たちは、お互いたまたま隣に座っていただけの、全く見知らぬ相手なのである。マッサージをしましょうかと声をかける勇氣と氣遣い、心構え、しつかりした受け答えにきつと良い教育を身につけられた方々なのだろうと思わずにはいられなかった。

「お礼に何か飲み物でも・・・」
「いいえ、そんなつもりではないので結構です」とハッキリした口調で断られてしまった。失礼な言い方をしたと後悔している。少し雑談をしてから丁寧にお礼を言つて別れた。気を付けて帰るようには手を振ってくれた姿が可愛かった。

後日知人達にこの出来事を話してみたが「そのような話を見たことも聞いたこともない」と一様に驚いていた。

ひよつとして私は狐か狸に化かされていたのだろうか？いやいやとんでもない。まぎれもない事実である。あの時あり得ないことが起こって、とても幸福な気分を味わったはずだ。夕暮れの横浜で、

あのような氣遣いの出来る優しい若者がいたことを私は一生忘れないだろう。感謝の気持ちで一杯である。

ところで、最近電車で席を譲られることが時々ある。そういう年齢になってきたかと自覚するしかない。しかし、氣持ちだけは明るく前向きに。年を重ねるのも悪いことばかりではない、と開き直っている。

人生は順風満帆ではない。辛酸を嘗める時もあるだろう。それでも一度しかない人生をあの女学生たちが遅しく豊かに生きていって欲しいと心から願う。(終)

【筆者紹介】

平成30年3月入会。千葉県出身。神奈川歴史研究会、日本美術史同好会所属。本部正会員。趣味は、ゴルフ、居合道、染色、木彫、樹木園ボランティア、伝統芸能、写経、ハスとスイレンの栽培、メダカの飼育等々多彩です。入会動機は、皆様の若々しさと溢れるエネルギー、そして楽しい雰囲気に着きつけられ気が付いたら入会しておりました。運命的な出会いを感謝しておりますとの事。